

## 見えない“正解”を求め、 絶えず“答え”を探し続ける

子どもたちだけではなく、お母さんたちにも人気が高いテレビドラマ・スーパー戦隊シリーズ。その一つ、『手裏剣戦隊ニンニンジャー』でアオニンジャーを演じた松本 岳さんは、専修大学在学中に俳優としてデビューを飾る。芸能界へ入る経緯や役者という仕事、演技の幅を広げるためにモチベーションを保ち続けるコツなどについてうかがった。



まつもと・がく ● 1993年生まれ、富山県富山市出身。2017年、専修大学経済学部経済学科を卒業。高校時代は全国大会常連校である富山第一高校のサッカー部に所属。専大進学後、2年次（13年）より芸能事務所・イザワオフィスに所属し、俳優として活躍する。テレビドラマ『手裏剣戦隊ニンニンジャー』や『Dr.DMAT』、舞台『モブサイコ100』『池袋ウエストゲートパーク THE STAGE』など数々の作品に出演。21年10月には舞台『ABSOLUTE METAL〜黎明〜』への出演が決定している。

### 俳優 松本 岳さん (平29・経済)

**現**場で“成長している自分”を実感できた『手裏剣戦隊ニンニンジャー』（2015～16年放送）が、俳優としての転機でした」

少し懐かしそうに語る松本 岳さん。「ニンニンジャー」とは、若手俳優の登竜門といわれている特撮テレビドラマ・スーパー戦隊シリーズの第39作で、1975年に放送を開始した『秘密戦隊ゴレンジャー』の流れをくむアクションヒーローものだ。松本さんは、この作品にアオニンジャーこと加藤・クラウド・八雲役として出演していた。

「テレビドラマは通常、週1回・3カ月という放送期間がほとんどですが、スーパー戦隊シリーズは1年間続く、とても長い作品です。そのため、この撮影中は、在学していた専修大学を休学し、東映撮影所がある大泉学園（東京・練馬区）へ引っ越しました。毎朝5時には撮影所に入り、遅いときは24時を超えるまで撮影をしていることも。正直、最初は大変だなと感じていました」

撮影スタッフ、特にベテランのカメラマンから怒られることが多かった。

「『やめちまえ！』と怒鳴られることも、一度や二度ではありませんでした。『カメラがここにあると分かってんだから、こっちを見ろ！』とか。1カ月くらい毎日のように叱られていて……。でも、不思議とそこに、“愛”が感じられるんです。いいものをつくらうと

して怒ってくれているのだ、と伝わってくるのか。20歳を超えて、他人から怒られることなどなかったのが怖かったのですが、嫌ではありませんでした。それに、たまに褒められると、すごく嬉しいんです。撮影中盤くらいからは、そのカメラマンさんとも、ものすごく仲良くなっていました」

実力不足である自分自身を見つめ直し、日々叱られながらも、そこから何がしかの気づきを得て、己のものにしていく——その繰り返しで、着実に松本さんを成長させていった。また、件のカメラマンをはじめ、スタッフや共演者との一体感も生まれていき、少しずつ現場で自分らしさを出せるようにもなったという。中学生のころから得意だったバク転を取り入れたアクションを、スタントなしで挑戦したいと志願するなど、さまざまなことに臆することなく挑んでいけるようになった。

「ニンニンジャーをやり遂げてからは、セリフのある役をいただけるようになりました。この作品への出演は、俳優としての自覚を持てるようになり、俳優という仕事を続けていく覚悟が決まった転機になったのです」

#### 初の撮影現場で いきなり試練が

富山県富山市八尾町出身の松本さんは高校時代、全国高校サッカー大会で優勝経験を持つ名門・富山第一高校サッカー部に所属して、レギュラーを務めたスポーツマン。卒業後は専修大学経済学部へ進学、勉強に遊びにと、キャンパスライフを謳歌していた。

それが、思いもかけないきっかけで芸能界へ入ることになる。

「通っていた美容院で、スタイリストの方から、髪型の写真を撮らせてほしいと頼まれました。店舗のホームページに載せるための写真ということで

したので、気軽に引き受けたのです。その写真を、現在所属している事務所（株式会社イザワオフィス）のマネージャーさんが見て、声をかけてくれたのです」

しばらく新人を採用していなかったイザワオフィスでは、女性タレントを探していたそうだが、その方針を変えさせるほどの何かを松本さんに感じたのだろう。スタイリストを通じてコンタクトがあり、下北沢のカフェでマネージャーと会うことになった。

「当時は、いろいろなことに興味がありました。私の実家はイタリアンレストランなので料理人も気になっていましたし、空間デザイナーもいいなと思ったり。そういった対象の一つに、芸能界もありました。ただ、それくらいの思い入れだったので、どうかと悩んだのも事実です。せっかく大学へ行かせてもらったのだから、しっかり卒業しなければ、という思いもあり、最初は、考えさせてください、と即答はしませんでした」

意見を聞こうと両親に電話したところ、「騙られてお金をとられるのでは……？」と、心配していたそうだ。

「結局、事務所の人と一緒に富山の



専修大学在学中に通ったステラ・アドラー演劇学校で、指導者と一緒に

で、両親には納得してもらうことができました。ただ、まだ私には気持ちにフワフワしたところがあって、チャンスがあるならやってみようかな、という程度の考えでした」

ところが、事態は急速に動き出す。事務所に所属して、わずか2カ月でテレビドラマへの出演が決まり、『名もなき毒』という作品に、刑事・近藤役で出ることとなったのだ。

「最初の撮影で、いきなりシリアスなシーンを演じることになりました。父親の遺体と対面した娘・暁子役の真矢ミキさんに、父親の遺品を確認する、というシーン。ほとんどセリフはないのですが、目の前にテレビで見ていた真矢さんがいるし、周りにはカメラがたくさんあるし、何が何だかわかりません。自分のいくつかのミスで、高まる気持ちをつくっている真矢さんに迷惑をかけていたらどうしよう、という不安も湧き上がってきて、怖かったですね。実際、監督もすごく厳しい方で、スタートから試練でした」

この撮影は、「先輩俳優をよく見て学べばいい」など、監督やスタッフからのアドバイスで何とか乗り切れたものの、仕事は簡単には軌道にのらなかった。ドラマ出演が決まっても、ほとんどセリフのない役ばかり。仕事のない期間が続くと、不安が積み上げてくる。





写真提供=株式会社イザワオフィス

その流れが変わるきっかけとなったのが、ニンニンジャーだったのだ。

### 一発本番の映像、積み重ねでつくる舞台

ニンニンジャー出演から5年以上が経過した現在、松本さんは舞台やドラマ、CMなど、数々の作品で経験を積んできた。いまではおぼろげながらも、俳優の面白さがわかってきたという。

「いろいろな役との出会いがあります。刑事をしたりヒーローになったり、消防士や救急救命士の役を演じたことも。さまざまな職業や、架空の人生を

疑似体験できるのは、この仕事ならではの面白さでしょう。そして、作品ごとに多くの人との出会いもあります。例えば、舞台では、お客様にはステージ上の役者しか観る機会はありませんが、一つの現場をつくり上げるために、スタッフや演出家、脚本家、宣伝、販促など、100人以上の関係者が携わっていて、成功させるために知恵や力を尽くしています。そういった皆さんとの一体感が生まれて、良い作品に仕上がったという手応えがあったときは、本当に嬉しいですね」

舞台と映像作品との違いを冷静に楽

しむだけの余裕も出てきた。

「映像は、撮影日に現場へいって、その場で役柄を表現しなければなりません。“一発本番”だからこそ、その瞬間でしか生まれないシーンというものがあるって楽しいんです。一方、舞台は10日間ほどの本番のために、1カ月以上前から稽古に入ります。『池袋ウエストゲートパーク (IWGP) THE STAGE』という舞台では、尾崎キョウイチというダンサーの役を演じましたが、私は踊りがとても苦手で……」

共演者の中にダンスの上手な人がいたので教えてもらい、稽古の後も残って練習していたという。これはあくまでも松本さんの例だが、全員でそうした時間と力を注いでいるからこそ、舞台上で形になったものを観客に楽しんでもらうことができるのだろう。

「舞台は長い稽古を積み重ねて、共演者や演出家の方たちと少しずつ作り上げていく面白さがあります。演じるという点では同じですが、アプローチの違う映像と舞台には、それぞれの魅力があってどちらも好きです」

しかし、何年も続けてくると、俳優業の難しさを感じることも当然ある。

数学のように、答えに到達する方程式があるわけではない。そもそも芝居には、正解があるわけでもない。作品



ごとに、どう演じるのか、自分なりに準備をして現場へのぞんでいるという。

「例えば、IWGPは本からテレビドラマ、アニメにもなっている人気作品なので、石田衣良さんの原作は読みましたし、映像も観ました。ただ、関連した作品がないときでも、台本を読んで『あの映画に出ていたこの役に近そうだ』といった、漠然としたイメージを持って、役をつくっていくことが多いかもしれませんね。そうして試行錯誤を重ねた結果、本番で表現した芝居が自分なりの“答え”なのだと思います。もちろん、ほかの人が同じ役を演じれば、その人なりの答えがある。その違いこそ、演じることの醍醐味なのです」

### タスク管理のコツを専修大学で学ぶ

本番へのぞむにあたって、入念に準備する松本さんのこうした性格は、昔からだったという。高校サッカー部時代も、ウォーミングアップに時間をかけ、スパイクの手入れをすることが好きだった。

「ちょっとストイックに向き合うところは、父親の影響かもしれません。イタリア料理のシェフをしていますし、長丁場の仕事が終わってからもランニングをしたりする人です。もともと、父は泳げなかったのですが、45歳くらいのときにランチ休憩の時間を使い、水泳の練習をして泳げるようになったり。50代のいまではトライアスロンに参加していますし、この間はフルマラソンにも出場していましたからね。本当にすごいと思います。そういう姿をずっと見ているうちに、自分もそうやってきたのかもしれません。でも、父には勝てないと思います(笑)」

ただ、ストイックな松本さんでも、

いまだ不安にかられることが。俳優という職業は安定しているわけではなく、仕事がぽっかりと空くことがある。すると、演技の幅を広げるためのモチベーションや好調な状態を、維持できなくなるのだとか。

「仕事がない期間でもしっかり準備をするのは、それで少し安心したい、という部分があるのかもしれませんが。最近、体を動かしたり、体が硬いのでストレッチをしているのですが、これも何かあったときのことを考えて行うところが強いのです」

実際、姿勢の良い役を演じることになったとき、ストレッチをしていたおかげで、スッとした演技を難なくできたという。また、姿勢を整え、体を動かすことは、好調さやモチベーションの維持にもつながる。

「後は、気持ちのリフレッシュも意識して行っています。友人たちとフットサルを楽しんだり。専大時代の同級生は、証券会社勤務や海外で働いている人もいたり、自分とは違う世界で活躍しているので、その話を聞くのも、知らない世界をのぞくようで楽しいですね。そうやって気持ちのバランスをとりながら、俳優という仕事を長く続けていきたいと思っています」

ニンニンジャー出演を経て専大へ復学後も、いくつもの役を演じながら授業に出席していた松本さん。当時、どのように過ごしていたのだろうか。

「大学時代に、卒業することと仕事を両立させるため、いかにして時間を有効に使うかを、毎日工夫しながら身につけました。複数の現場が並行するいまの仕事にも、その術が生きています」

父親譲りの入念さと、専大で体得したタスクマネジメントを武器に、28歳の若き役者は、さらなるステージを目指す。(2021年8月27日取材)

### 主な出演作

#### 【ドラマ】

- 『名もなき毒』(2013年)
- 『Dr. DMAT』(2014年)
- 『手裏剣戦隊 ニンニンジャー』(2015年)
- 『キャリア〜掟破りの警察署長〜』(2016年)
- 『御茶ノ水ロック』(2018年)
- 『Wの悲劇』(2019年)
- 『病院の治しかた』(2020年)

#### 【テレビ】

- 『ナイト・コメディー とりのシムラ』(2014年)
- 『あのニュースで得する人損する人』(2016年)
- 『テストの花道 ニューベンゼミ』(2016年)
- 『炎の体育会TV』(2016年)

#### 【映画】

- 『帝一の國』(2017年)
- 『岡野教授の千年草花譚』(2020年)

#### 【舞台】

- 『青年Kの矜持』(2014年)
- 『僕らのピンク スパイダー』(2017年)
- 『ジョーカー・ゲーム』(2017年)
- 『デジモンアドベンチャーズ』(2017年)
- 『歳が暮れ・るYO 明治座大合戦祭』(2018年)
- 『私のホストちゃん THE PREMIUM』(2019年)
- 『ぼくらの七日間戦争』(2020年)
- 『ハンスアップ』(2020年)
- 『池袋ウエストゲートパーク』THE STAGE (2021年)
- 『モブサイコ100』〜激突! 爪第7支部〜 (2021年)

#### 【CM】

- 『アサヒスーパードライ』年末年始編(2019年)

### 松本さん出演、最新舞台

#### 『ABSOMETAL〜黎明〜』

“フュージョニカルスクリーン”を駆使し、映像と舞台を融合させる斬新な演出で話題を呼ぶ『ABSOMETAL』シリーズのエピソードゼロともいえる作品。2020年5月に上演予定だったが、緊急事態宣言の発令によりやむなく延期。その期待作が、10月16日(土)に待望の初日を迎えます。

上演期間：10月16日(土)～24日(日)  
会場：新宿村LIVE  
問い合わせ先：株式会社style office  
styleoffice.info@gmail.com  
TEL. 090-9146-5528

